

書写の活用力を育てるため 私の授業改善

福岡県広川町立中広川小学校

塚本 保代

一 はじめに

「先生、どうして習字の勉強があるのですか」—ある子どもから発せられた素直な疑問である。日常生活の中で文字を書く手段として筆を使った経験のある子は皆無に等しい。その分、子どもたちに毛筆の学習の必要性が実感としてないのは当然のことである。そこで、新年度出会った子どもたちと最初に行う書写の授業では、その率直な疑問に答えることから始めるようにしている。

二 毛筆の学習は何のため

では、毛筆を学習する必要性（意義）はどこにあるのだろう。—日本の伝統文化だから……何かすっきりしない。子どもの心にも響いている実感がない。そんなとき、広島大学の松本仁志先生が書かれた文章を読む機会があった（『ことばの学び』10号）。私も含め子ども疑問に対する答えがそこにはあった。

まさしく「目から鱗が落ちる」思いだった。

三 授業を変えなければ……

それまでの私の授業は、「手本の説明・示範・練習・添削・清書」というスタイルから抜け出せないでいた。松本先生は、次のような観点から書写の学びの提案を行ってあった。

- ① 一人一人の文字を育てる
- ② 思考活動を重視した学び
- ③ 日常使用する硬筆を中心とした学び

このことを知り、毛筆書写と硬筆書写の関係と、その指導のあり方が自分の中で明確になった。硬筆書写の基礎・基本を身に付けさせるための方策の一つとして毛筆がその役割を担うということである。そして、学んだことが日常に生かせなければ、それこそ学習する意義は薄いものになってしまう。そのためには、授業における思考活動は不可欠であることを改めて知った。このことが授業改善を行

う大きなきっかけとなった。

さらに、今回の学習指導要領の改訂においても、習得した基礎的内容を日常生活や学習活動に生かすことのできる力、つまり「活用能力」の重要性を明記してある。実践の方向性をさらに強く示唆してもらった思いである。その中の一つの実践を報告したい。

● 六年生単元

「伝えたい気持ちを文字に込めて」の実践

○ 授業の意図

- ① 手本を目標と捉えるのではなく、現時点での「自分の書」を出発点とし、そこからよりよい文字へ自ら高めていくという意識をもたせる。

② 活用力を育てるための二点に留意する。
・ どのような組み立てになっているか、どのような筆使いをしたらよいのかなど、既習内容を想起したり、生かしたりするような

思考活動を仕組む。そのために、既習内容の掲示物を準備して常にふり返られるようにしたり、グループ交流を取り入れたりするなどの手立てを講じる。

・単元の導入で漢字の組み立てを硬筆で考えさせる。また、単元の終末では、硬筆で漢字を清書した「説明書」を書く活動を仕組む。このことにより、毛筆の学習を硬筆に生かそうとしたり書写の学習を日常に生かそうとしたりする意識を育てる。

○目標

今まで学習した内容（組み立て方・筆順・字形・筆使い・文字の大きさ）を生かして、うちの人へ感謝の気持ちを込めた文字のプレゼントをしよう。

○学習計画

① 字の意味や成り立ちを辞典で調べ、うちの人に贈りたい漢字一字を決める。（一時間）

② 「試しの書」を書きグループで交流した後、自分の課題を設定する。（一時間）

③ 漢字の組み立てや画の長さ・向きを硬筆文字でとらえ、練習する。（一時間）

④ 毛筆で練習し、色紙に清書をする。（二時間）

⑤ 文字の意味やその字に込めた思いなどを書いた「説明書」を硬筆で書く。（一時間）

○学習活動の実際

どんな字を贈ろうかとあれこれ迷う子どもたちの姿は実にほほえましかった。自分の名前の一字を選ぶ子、辞書で今の自分の気持ちに合致する字を探す子など、どの子どもの表情も真剣だった。

その後、「試しの書」を書き、整った字に成長させるための出発点とした。

選んだ一字を硬筆文字で研究する際に、次の三点から分析するように確認した。また、どこに目をつけたらよいか具体的に支援ができるよう、子どもたちが選んだ漢字を三つの観点ごとに分類しておいた。

- ① 上下・左右等の大きさ―育・和・遅など
- ② 画の長さ―幸・生・孝・など
- ③ 画の向き―力・大など

これらの観点から自分の字を分析研究したり、グループ内交流を行ったりすることで、自分の課題を具体化することができた。そして、その課題に留意しながら練習・清書を行った結果、以前よりも整った字になったと自己評価した子どもが九割であった。

反面、筆使いについての課題も見え、習得すべき内容の完全定着の難しさを感じた。

色紙に向かい、まさしく筆を下ろそうとするその瞬間。教室は静まりかえり、まるで呼吸さえも止まっているかのような緊張の時である。

ある。私は、この瞬間がたまたまなく好きである。目まぐるしく過ぎていく毎日だからこそ、この瞬間が大切にされるべきだと強く思う。



四 おわりに

「活用力」を見越した授業実践を行うようになって改めて思うことは、基礎基本の完全習得の必要性及び重要性である。「どんな力を活用させたい」のか、そのために「どんな内容を習得させておくべき」なのか、しっかりと見極めながら実践を重ねていきたい。

また、どんなに技術が進歩しようとも自ら筆を取って書いた字にこそ「思い」はより深く込められるということを信じていたい。

つかもと やすよ 「活用力」を育成するための授業のあり方について、日々模索しながら実践を行っている。子どもたちの「わかった！なるほど！」のことがエネルギー源。